

第17回 ちゅうでん教育振興助成（平成29年度）

報告書資料 一般 - 69

学校名・団体名	刈谷市立小垣江東小学校
HPアドレス	http://www.city.kariya.aichi.jp/school/ogahigas/toppage.html
コース	学校支援
活動・研究テーマ	特別支援学校や地域と連携した命の教育
<p>〈活動・研究の意義、目的〉</p> <p>本校は、自然や生き物とのふれあいの中で感動する心、生き物を大切に する心、命を大切に する心を育てるべく「命の教育」に取り組んできた。30 年度に同じ敷地内に開校する特別支援学校や学校給食センターとの視 点を加味した「命の教育」を行うことで、さらに心の豊かな子ども達に していきたいと考えた。</p>	

1 実践の内容と成果について

計画にもとづき、下記のような実践活動を行った。そして、下線部分のような成果が見られた。

(1) 一人一鉢 教材園での栽培活動

全校児童が自分の鉢に、花を植え年間を通して栽培活動を行った。「先生見て見て、こんなに大きくなったよ。」と、登校してきた3年生の子が、ランドセルを背負ったまま、一人一鉢で育てている自分のオクラを指差す。すると隣の男の子が「ぼくねえ、オクラの花のつぼみとオクラの見分け方を見つけたんだよ。」となんとも得意げに報告にやってくるような姿が見られた。



(2) 私たちの命を支える食について学ぼう

① 隣接する学校給食センターとタイアップした食育の推進

ア 栄養士を講師とした食育

小学校2年生の児童を対象に、その日の給食に出てきた献立を使って、栄養のバランスを考えた食事をするの大切さについての栄養士による授業を行った。子どもたちは、バランスの良い食事について学ぶことができた。



イ 給食センターの施設見学 (11月)

30周年記念式典が行われた11月9日に、来校者や地域の方に、給食センターを見学する機会を設けた。さらに、3月2日に3年生が給食センターを見学した。

② 児童委員会活動による食育活動の推進 (通年)

ア 放送委員会による献立一口メモの放送

給食センターから送られてくる「献立一口メモ」を、毎日の給食時に放送委員の児童が読み、全校に伝えている。

イ 給食委員会の残食調査。完食をすすめる活動

残食を減らす意識を高めるために、強調週間だけでなく、給食委員会で主食の残量をはかっている。そのため残食が減っている。

ウ 保健委員会による掲示。本日の給食食材を栄養素ごとに掲示

保健委員の児童が、保健室前の掲示板に、その日の給食の献立を5つの要素に分けて表示している。



(3) ホタルの飼育活動 (4年生・通年)

① 新しいホタル小屋のスタート

本校でのホタルの飼育は今年で、11年目になる。特に今年の5月には新しいホタル小屋を含めたホタルの飼育施設が新設された。毎日、当番の子どもたちが職員室のホタルの幼虫の飼育スペースにやってきて、カワナナの殻を万力でわり、幼虫の中に入れる作業を行ってきた。今年本校にやってきた教員が、幼虫のえさやり作業を見ていると、飼育当番の子たちは、その手順についてとても誇りをもった様子で説明してくれた。

5月2日、これまで子どもたちが丹精込めて育てた幼虫500匹を、新しく完成したホタル小屋に放流をする放流会の日を迎えた。快晴の当日、地域のホタル会の方と一緒に、ホタル小屋の中を通っている明治用水の水質検査を行った。pHなどが、ホタルの幼虫の生育に適した環境であることを確認した子どもたちは、ホタル会の方のご指導のもと、新しい施設にホタルの幼虫を放流した。水の中に入った幼虫たちをじっと見ていた男子が、「砂をかき分けて入っていくよ。」「わあ、ほんとだ。早く成虫になってね。」と。これまで1年近く自分たちが育てた幼虫たちが、立派な成虫になって光を放ちながら飛び交う姿を想像しながら、子どもたちは放流した。



放流を行った子どもたちの感想には「僕たちは、夏休みや冬休みの時にも、学校に来てえさをやりました。幼虫にたくさん食べてもらってたくさん光を出す成虫になってほしいからです。あと1か月したら、きっと立派な成虫になってくれると思います。夜、みんなで光っている様子を見に行きたいです。」と書いてあった。

② 待ちに待ったホタルの鑑賞会

放流会の後、子どもたちは、放課になるとホタル小屋のところにやってきては、水辺を観察した。「幼虫みたいなものはいないね。」「他の生き物はどうか。」そんなことをつぶやきながらホタル小屋の中を見ているときに、突然サッカーボールが飛んできたようで、ホタル小屋の小川の中に落ちてしまった。「あ、幼虫がしんじょう。」と思った子どもたちは、担任の先生のところに走っていった。「先生、遊んでいるボールが飛んできてしまって、幼虫が死んじゃうかもしれない。」と悲壮感だらけの顔で訴えた。担任の先生の手を引っ張りながらホタル小屋に向かった子どもたちは、「先生、どうすればいい。ボールで遊ぶのをやめてもらえばいい。」

いかな。」と訴えた。担任の教師は、「そうだなあ、一度、他の先生に相談してみる。」と言った。やや安心をしたような表情で子どもたちは、教室に戻っていった。担任の先生から報告を受け、結局工事業者に頼んで、ドームができるまでは、簡易のついでを設置してもらうことになった。子どもたちのホタルへの強い愛着が、周囲の大人たちを動かしたのである。

ホタル鑑賞会の開催が決定し、4年生の子どもたちは鑑賞会を宣伝する準備をした。画用紙にホタルの絵をかき、宣伝をする台詞を相談した。中にはホタルに関するクイズを作ったグループもあった。子どもたちは、たくさんの人に来てもらおうと何度も練習を繰り返した。こうして、給食の時間にすべてのクラスに出向きホタル鑑賞会の宣伝を行った。

鑑賞会の日がやってきた。午後8時、親と一緒にやってきた子どもたちは、小屋の中に入るやいなや、淡い光を放ちながらゆらゆらと飛ぶホタルを見つけた。「あ、いたよ。」「みてみてここにもいたよ。」これまで、1年近く育ててきた幼虫が立派な成虫になって目の前を飛んでいる姿は、子どもたちの心に大きな足跡を残した。

(4) 子牛の飼育活動 (5年生 5月~11月)

1学期にまず、牛についての理解を深めるために、インターネットを使った調べ学習を行った。

牛の体重、飼育方法、種類、寿命、えさの種類など、各自自由に調べて牛についての理解を深めた。その後、地域で牧場を営んでいる清水牧場さんの協力を得て、牧場を見学した。見学をして、牛舎などの建物や牛の様子を確認した。

次の授業では、清水牧場で体験活動を行った。ブラッシング、ふんかき、えさやり、乳搾りの練習、心音調べ、散歩など6つの体験を行った。最初は怖がっていたり、匂いが気になると言ったりしていた児童であるが、少しずつ慣れた子ども達は、徐々に牛に愛着が湧くようになった。

2学期は、子牛を育てることについて考えさせた。「自分たちの手で命を育てたい」と非常に意欲的な児童の姿が印象的であった。2学期の学習の流れを説明し、見通しをもたせた。最初に、子牛の名前を考えさせた。どの児童も願いを込めた名前を真剣に考えることができた。多数決の結果、「優希(ゆき)」と名付けることが決まり、10月に子牛の入学式を迎えた。



丁寧にブラッシングをする

入学後は、当番制により、児童は飼育を行った。子牛を飼育していく中で、仕事がわからず、立ち止まってしまうなどの多くの課題が生まれた。そこで、仕事の分担の仕方、時間内に終わるための方法などを各班で話し合わせた。話し合いでは、各自が声を出して意思疎通を図ること、仕事内容をしっかり把握することなどが確認された。その後は、人数配分を確認したりコミュニケーションを積極的に取って仕事を分担したりする姿が見られ、仲間との関わりを深めることができた。

児童は、日々、優希の飼育をして触れ合う中で、優希の成長に気付いてきた。体が大きくなり、ふんの量が増え、その成長に喜ぶ児童がいたが、中には責任をより感じるようになった児童もいた。優希の飼育をすることで、世話を続けることの大切さと大変さを感じ、命を預かることへの責任感をもつことができた。また他の学年の児童の中には、毎日牛小屋にやってきては、優希に話しかけたり、自分の手をなめさせたりした子も見られた。

子牛の卒業式後、教室で総合的な学習の時間を使って振り返りをした。子牛との思い出や思い、学んだことなどを、児童は思い思いに書いていった。また、命をいただいて生きていることから、感謝して精一杯生きるというような記述も見られた。

(5) 地域の老人ホームを訪問するための事前学習 (5年生)

11月に刈谷市の社会福祉協議会の方に老人福祉についての授業をしていただいた。その中で認知症についての学習をした子どもたちは、今後、本校のとなりにある老人福祉施設に行き、見学およびお年寄りとの交流会をおこなう計画である。

(6) 来年度の特別支援学校開校に向けた「障がい児・者理解教育」の推進

① ひいらぎ特別支援学校との交流 (11月)

半田市にある「ひいらぎ特別支援学校」とインターネット回線をつなぎ、テレビ会議システムを使った交流会を行った。また、本校のすべての教職員が現職教育の一環として、特別支援学校への視察に行った。

② 障がいのある子どもをもつ保護者の話を聴く会、刈谷特別支援学校の先生の話をもつ会の開催 (2月)

1月と2月に本校の全校児童を対象に、上記のような会を開催した。保護者としての子どもへの思いや、障がいはあっても心はみんなと同じであるということをお話していただいた。そして、本校の子ども達は、「一人一人のちがいは個性である」「早くお互いの名前を覚えて、かかわりたい」「元気よくあいさつをかわしたい」という思いをもつことができた。